

# 旧家における資料発掘と現地展覧会

## —横浜市都筑区・中山恒三郎家の事例から—

横浜開港資料館 吉田 律人

### はじめに

人文系博物館と自然系博物館の連携や、博物館と学校教育との連携（博学連携）、博物館と図書館・文書館との連携（MLA連携）など、今日、博物館における連携事業の形は多様化しつつある。筆者自身もこれまで横浜都市発展記念館や横浜市史資料室との連携展示「関東大震災90周年 関東大震災と横浜」や<sup>1</sup>、宮内公文書館との連携展示「明治天皇、横濱へ—宮内省文書が語る地域史—」<sup>2</sup>、横浜市中消防署との連携展示「横浜の大火と消防の近代史」などを担当し<sup>3</sup>、博物館における連携事業の重要性や可能性を認識してきた。他の機関との連携事業は、組織文化等の違いから調整作業などで苦勞する一方、力を合わせることで、単館では得られない成果を得ることができる。また、専門分野を越えた新たな人的な繋がりを開拓することも可能となろう。

こうした連携事業は「展示」という教育普及の場面にとどまらず、資料収集や整理・保存、調査研究の場面でも実施していくことができる。特に資料収集の面においては、①博学連携、②地域連携の二つの側面において博物館活動を広げていくことができると考える。そこで本稿では、横浜開港資料館を含めた公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団（以下、「財団」）が実施した資料収集における連携事業の実践例、具体的には、中山恒三郎家の資料発掘と現地展覧会の内容を紹介しつつ、連携事業を意識した資料収集とその後の展開について考察を加えていきたい。なお、紙幅の関係上、①と②のすべてを詳述することはできないので、本稿では後者の点に重きを置きたい<sup>4</sup>。また、本稿で分析対象とする連携の主体は、博物館施設と資料所蔵者、地域の自治会等である。

さて、ここで紹介する中山恒三郎家とは、横浜市都筑区川和（旧都筑郡都田村川和）に所在する旧家で、県下最大の酒問屋として隆盛を誇ったほか、自宅中庭の「松林圃」は全国レベルで知られた著名な菊園であった<sup>5</sup>。また、川和は都筑郡の政治・経済の中心地として発展した地域で、郡役所や警察署、郵便局のほか、山王屋系列（中山恒三郎商店を含む中山一族）の大商店が軒を連ねていた<sup>6</sup>。この資料群の発掘から将来的に、横浜市北部地域の歴史像や酒問屋の経営実態の解明、地方名望家研究の進展などが期待される。

### 1、横浜開港資料館の機能

最初に財団の概要について整理しておこう。財団は横浜市の出資によって設立された公益財団法人で、横浜に関する歴史資料の収集や保管、調査研究を行い、その成果を広く公開することで、市民文化の発展に寄与することを目的としている。これに基づき、2003（平成15）年9月の地方自治法改正以降、指定管理者として横浜市歴史博物館、横浜開港資料館、横浜都市発展記念館、横浜ユーラシア文化館、横浜市三殿台考古館の5施設の運営を担うとともに、2007年からは横浜市史資料室の運営業務も受託している。さらに埋蔵文化財センターや八聖殿郷土資料館を運営するほか、称名寺境内等の史跡管理も行ってきた。職員数はおよそ60人、その半が専門職員（調査研究員・学芸員）で、考古学から現代史、建築史、さらにアジア史の担当が揃っている。

そのなかで筆者の勤務する横浜開港資料館は、江戸時代後期から大正期までを担当する文書館兼博物館施設であり、1981年6月に旧英国総領事館の跡地に開館した。以来、近代横浜の「記憶

<sup>1</sup> 詳細は横浜都市発展記念館・横浜開港資料館編『関東大震災90周年記念 関東大震災と横浜』（公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、2013年）及び青木祐介・吉田律人・松本洋幸「関東大震災90周年連携展示の試み」（『横浜都市発展記念館紀要』第10号、2014年3月）を参照。

<sup>2</sup> 横浜開港資料館・宮内庁宮内公文書館編『明治天皇、横濱へ』（公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、2016年）。

<sup>3</sup> 横浜開港資料館編『横浜の大火と消防の近代史』（公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、2019年）。

<sup>4</sup> 前者については資料収集を通じた大学教育との連携という観点から改めて別稿で論じたい。

<sup>5</sup> 内外新聞通信社編『神奈川県勢総覧』（内外新聞通信社、1938年）48頁。

<sup>6</sup> 相澤雅雄『横浜・緑区 歴史の舞台を歩く』（昭和書院、1991年）106～107頁。

装置」として資料の収集、整理・保管に努めるとともに、調査研究の成果を年4回の展示会や講演会、出版物等の形で公表してきた。現在の収蔵資料の点数は約27万点で、それらを5人の専門職（館長を含む）で管理・運営している。施設の最大の特徴は、文書館機能を有する点で、館内の閲覧室では、公開準備が整った所蔵資料を閲覧に供している。また、専門職員（調査研究員）が午前と午後で当番を設定し、レファレンス対応に当たっているほか、午後は閲覧室の受付で待機して各種業務を行っている。ここで重要なのは、利用者の質問だけでなく、歴史資料に関する情報も閲覧室に寄せられる点である。中山恒三郎家と財団との邂逅もここから始まった。

## 2、中山恒三郎家の調査と「発掘」作業

2015（平成27）年10月21日、中山恒三郎家の6代目当主である中山健氏から自宅の資料に関する相談が閲覧室に入った。中山家では、川和保育園移転に伴う敷地整備を行っており、その過程で蔵に入ったところ、大量の古文書が出てきたという。すでに横浜開港資料館では、1995年に中山恒三郎家の分家である中山幸三郎家の調査を行っており、「中山浩二郎家文書」として寄贈を受けていた<sup>7</sup>。その繋がりから中山氏は閲覧室に連絡を入れたのである。直ちに専門職員の間で調整が行われ、学芸担当係長の斉藤司（当時）と筆者が現地を訪れることになった。

11月5日、第1回調査として川和を訪れた筆者たちは、中山氏に案内いただき、敷地内の建物の調査を行った（図1）。この時点で敷地内には、母屋や書院、店蔵のほか、蔵2棟、諸味蔵、小屋などがあり、いずれの建物でも歴史資料の確認ができた。特に店舗として活用していた店蔵の2階では、壁面の棚を開けただけでも、書簡の束が山のようにっており、とても二人だけでは対応できないと判断した（図2）。その後、職場に情報を持ち帰り、改めて財団全体で調査を行うことになった。12月8日に実施した第2回調査では、横浜開港資料館及び横浜都市発展記念館の館長・副館長のほか、各専門職員（文献史学・建築史）、横浜市歴史博物館から民俗学の専門職員が加わり、各種調査を実施、その結果、中山恒三郎家資料の整理と保存の方針が決定した。具体的には、

文書は横浜開港資料館と横浜都市発展記念館（文書班）、民俗資料は横浜市歴史博物館（民俗班）が担当することになり、あわせて建物については建築史の専門職員と埋蔵文化財センターが調査することになった。



図1 第1回調査（右の建物が書院、左の建物が母屋）



図2 店蔵2階から発見された文書群

続いて文書資料の整理・保存に関しては、蔵から資料を運び出し、箱に詰め替えた上で燻蒸、横浜開港資料館に搬入する道筋を立てた。これを実施するにあたって、人手が必要となったため、史学専攻の大学生・大学院生からアルバイトを募り、実行部隊を組織していった。その後、2016年1月末から9月にかけて中山恒三郎家で資料の搬出と整理を実施、専門職員が蔵の中で作業しつつ、アルバイトが後方で箱詰め等を行った（図3）。この過程で中山恒三郎商店の文書だけでなく、明治期に川和に存在した太陽合資会社（製糸工場）の文書や戸長役場文書、さらに個人の日記等を発見することができた（図4）。最終的な箱

<sup>7</sup> 横浜開港資料館編『横浜開港資料館資料総覧』（横浜開港資料館、2006年）46頁。

数は120cmサイズで約350箱に達し、敷地内の諸味蔵内に臨時の装置を設置した上で、民俗資料と合わせて燻蒸作業を行った(図5)。作業終了後は一部の資料を川和に残しながら、10月7日に横浜開港資料館への搬入作業を実施した。一方、中山恒三郎家の敷地内では、川和保育園移転に関する準備が進み、書院の曳家が行われたほか、庭園の整備も進められていった。



図3 整理作業に従事する学生



図4 箱の中から見つかった太陽合資会社の文書



図5 現地における燻蒸装置の設置

### 3、現地展覧会の準備

中山恒三郎家の資料群は質、量ともに貴重な発見であり、都市化の進んだ横浜市において、今後、これほどの資料群が出てくることはないだろう。また、この発見は川和にとっても地域の歴史を知ることができる出来事であった。歴史資料を後世に残していく上で、その重要性を広く伝えていく機会になると考えた財団は、中山恒三郎家の公開と発掘資料の現地展覧会を中山健氏に提案、これまでの作業過程から信頼関係ができたこともあり、すぐに快諾いただいた。さらに中山家の親戚の協力を得て、川和地域と連携で事業を進めることになった。その結果、財団と中山恒三郎家の主催で、現地展覧会の開催が2017(平成29)年4月30日と決まった。

具体的には、書院を会場に文書資料の展示を行うことになったほか、民俗資料については内部が整備された諸味蔵において展示することになった。また、書院→店蔵→諸味蔵→煉瓦造倉庫(醤油麹室)の導線を確認しつつ、見学者が中山恒三郎の歴史に触れられるコースを設定した。その準備作業は、展覧会2日前の28日午前から始め、文献史学と民俗学の専門職員がそれぞれの会場設営を行った。書院では、横浜開港資料館と横浜都市発展記念館の専門職員が川和町内会から借用した長机を活用しつつ、展示空間を構築、主に写真や村絵図、菊関係資料、太陽合資会社関係の資料を展開していった(図6)。



図6 文書の展示準備

続いて同日の午後には、プレス発表会を実施、中山恒三郎家文書の発掘と建物の公開について大々的に発表した。その事前準備として、4月14日にマスコミ各社に記者発表資料を配布、ここで

中山恒三郎家の来歴や発見された資料の意義、今後の整理計画などについて解説、数社から電話による問い合わせがあった。当日はNHK横浜放送局やケーブルテレビのイッツコム、朝日新聞、読売新聞、産経新聞、神奈川新聞、東京新聞などの記者が集まり、その状況は5月17日のNHKニュース「おはよう日本」などで放送されたほか、4月29日以降の新聞各紙にも報じられた（図7）。これによって資料発掘の成果を社会に対して広く発信することができた。



図7 マスコミの取材に対応する専門職員

#### 4. 現地展覧会の運営

現地展覧会当日の2017（平成29）年4月30日は晴天に恵まれ、外を散策するのにちょうど良い気候となった。この日の運営については、中山恒三郎家及び中山家の親戚のほか、敷地整備のスタッフ、川和商店街、さらに財団の専門職員が加わって行うことになった。専門職員は横浜開港資料館の副館長（文献史学）以下、筆者（同）、横浜都市発展記念館2人（文献史学・建築史）、横浜市歴史博物館3人（文献史学・民俗学）の計7人を配し、ローテーションを組み合わせながら来場者の誘導と展示物の監視、展示解説等を実施することとした。関係者は開場1時間前の午前9時30分に集合、準備作業を始めたが、午前10時頃には、入り口前に行列ができ始めたため、書院への案内を開始、その結果、予定していた午前10時30分頃には、会場は人で溢れることになった（図8）。



図8 民俗資料の展示会場と見学者の列

財団では、パンフレットとして『都筑の旧家中山恒三郎家所蔵資料』を作成、筆者が川和地域と中山恒三郎家との関係を説くと同時に、代表的な展示物の紹介を行った。来場者には受付でパンフレットを配布、既述のコースに沿って誘導していった。また、店蔵前では、テントを設営して休憩所をつくったほか、川和商店街が模擬店を出店、中山恒三郎家の竹林で採れた筍を使用したうどん、あんみつ、飲料等を提供した（図9）。ゴールデンウィークのなか、多くの来場者が訪れ、川和の歴史に触れるとともに、庭園を眺めながら食事を楽しんでいた。来場者の年齢層も子どもから高齢者まで幅広く、直接、資料が発掘された実際の現場を見てもらったことで、博物館の活動や地域史に対する理解も深まったと考えられる。



図9 川和商店街の模擬店

さて、専門職員を配した展示会場では、適宜、来場者の質問に答えながら誘導を行った(図10)。ここで印象的だったのは、来場者と専門職員との間でコミュニケーションがとれた点である。資料に関心を示す来場者に対し、調査や資料発掘の状況、また、歴史的な意義等を説明することで、直接、資料保存の重要性を伝えることができた。一方、来場者からは中山恒三郎家の思い出や川和地域に対する想いを聞くことができ、聞き取り調査(オーラル・ヒストリー)の必要性も痛感した。来場者の中には、展示資料を見て涙を流す高齢者もあり、資料収集の成果を示す上で、現地展覧会は大きな効果があった。最終的な来場者数は午前10時から午後4時の6時間で650人となり、終了後は各専門職員が展示物等を撤収して解散となった。一日の運営を通じて、多くの来場者に歴史を残す重要性を伝えることができた。



図10 展示解説を行う専門職員

## おわりに

博物館が資料の収集、整理・保存、調査研究、

教育普及を円滑に進めていくには、それらに対する市民の理解と協力が必要不可欠である。これを得る上で、資料の発掘現場で行った現地展覧会は大きな効果があり、また、資料所蔵者との信頼関係も深まった。特に現地において各種調整を行っていただいた中山恒三郎家の尽力は大きく、さらに展覧会終了後は同家の御厚意のもと、財団監修の記録集『松林甫一都筑郡 中山恒三郎家の記録一』(多賀商事、2018年)を刊行していただいた。この記録集は、中山恒三郎家の概要や敷地整備の経緯、資料調査・発掘の状況、現地展覧会の様子を一冊にまとめたもので、今後の調査研究活動の基礎となる成果である。加えて、現地展覧会は新たな地域連携の可能性を生み、2017(平成29)年7月27日には、川和小学校の教職員を対象に、川和地域と中山恒三郎家に関する研修会を実施することもできた。

こうした資料収集現場での普及活動、連携事業を通じて、地域や学校との間で新しい関係を構築することができたほか、多様な専門職員を抱える財団内部の結束にも繋がった。資料の発掘作業から現地展覧会にかけて、各分野の専門職員を揃える財団の特徴が発揮されたと考える。その一方で、現地展覧会に人員を割くことは、博物館に残る職員の負担になる部分もあり、施設運営に関する調整等を必要とした。現地展覧会の会期が数日間にわたる場合は、人員配置の面などで問題が生じるだろう。そうした点については順次改善していきたいと考えている。資料発掘の現場を公開する例は、考古学の遺跡発掘の現場では一般的だが、文献史学や民俗学の現場では数少ない事例だろう。今後も実践を重ねながらそのモデルケースの確立に努めていきたい<sup>8</sup>。

<sup>8</sup> 横浜市歴史博物館は令和元年度公開「川和の歴史に川和でふれる 中山恒三郎家書院及び諸味蔵」を2019年11月28日～12月10日の日程で実施、横浜開港資料館協力のもと、公開講座も実施した。